

ゲツセマネの祈り

マタイ26章36～46節

2022年4月3日

松田 基子 師

受難節第五主日を迎えました。刻一刻とイエス様に十字架が迫ってきます。イエス様は人類の罪を贖うために、ガリラヤから、弟子たちを連れて、過越祭を祝うエルサレムに来ておられました。過越祭は、神様がイスラエルの民をエジプトの奴隷から救出して下さった御業を、想起する祭りです。神様は、かの時に、頑ななエジプトに対して、神の使いを遣わし、エジプト人の長子と、家畜の初子を滅ぼされました。その時イスラエル人の家の入口には、羊の血が塗られ、神の使いはそれを見て過越しました。

祭りは、ニサンの月の14日、太陽暦では、3月末から、4月初めの頃です。エルサレム神殿で、屠られた羊を家庭毎に持ち帰り、家族の人数が少なければ、他と寄り合っ、その夜、過越の食事をするのが祝い方でした。イエス様はその、屠られた羊のように、これから十字架の死に向かわれるのです。それは民の救いの為でありました。マタイ26章26節から、イエス様と弟子たちの最後の晩餐が記されています。イエス様はこの最後の晩餐に於いて、ご自身が何故、十字架に架からなければならないのかを、弟子たちに分からせようとしておられます。イエス様は神の子の位を捨て、人の子として、この世にお生まれになりましたが、誕生前にその**使命は人類の罪からの救い**である事が告げられていました。マタイ1章21節で、天使はマリアの夫ヨセフに、

「マリアは男の子を生む。その子を
イエスと名付けなさい。この子は自分の
民を罪から救うからである」

と宣言されています。

イエス様ご自身が、その自覚を持っておられました。イエス様は最後の晩餐に於いて、ご自身がこれから受けられる、十字架の死の意味を、予め弟子たちに示されました。新共同訳聖書の、26章26節からの標題は、《主の晩餐》と記されていますが、岩波訳では、《イエスの死の意味》と記されています。26章26節に、一同が食事をしている時、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え

て、それを裂き、弟子たちに与えながら言われた。

「**取って食べなさい。これは
わたしの体である。**」

イエス様は、パンを裂くことによって、ご自身の体が、十字架に裂かれる事を表すと共に、弟子たちは、そのことによって、イエス様による救いの恵を受ける事が出来ると言う事を、お示しになりました。

続いて27節に、

「**また、杯を取り、感謝の祈りを唱え、
彼らに渡して言われた。**

『**皆、この杯から飲みなさい。これは、
罪が赦されるように、多くの人のために
流される、わたしの血、契約の血である**』

とあります。この言葉にこそ、**神様の人類救済の御心が、イスラエルの歴史の中に貫かれてきたこと**を表しています。

イスラエルの歴史を振り返りますと、奴隷のイスラエルを救出された神様は、彼らをシナイ山麓に導いて、イスラエルをご自身の民とする、その契約を結んで、律法をお与えになりました。出エジプト記の24章8節には、

「**モーセは血を取り、民に振りかけて言った。
『見よ、これは主がこれらの言葉に基づいて
あなたたちと結ばれた契約の血である』**

と記されています。申命記12章23節には、

「**血は命である(口語訳)**」

とあります。血は命、つまり存在そのものを表しています。神様に対する契約は、命と全存在を賭けて守られるべき契約なのです。

しかし、罪ある人間は、神様に背き続けました。神様は、人間が罪ある存在であることを、自覚するように、その罪の重さは、自分自身の命を捧げても、償い得ないものですが、人間は自分の命を献げる事が出来ないで、動物の血を捧げさせる事によって、人間に、自分の造り主に対する罪を覚えさせられました。しかし、それで、イスラエルが、罪を犯さなくなった訳ではありません。神様はそのような頑なな人類の代表であるイスラエルに対して、その先祖との契約の故に、彼らを見捨て、滅ぼすことをなさらず、尚もイスラエルの歴史を導いて、彼らの逆境の中で、預言者エレミヤに、新しい約束をお

与えになりました。

エレミヤ書31章31節に、

「見よ、わたしがイスラエルの家、ユダの家と新しい契約を結ぶ日が来る」

と言われ、34節に、

「わたしは彼らの悪を赦し、再び彼らの罪に心を留める事は無い」

と言われました。この様に罪が赦されると言う新しい契約が、結ばれる事が、預言されていました。イエス様は、

『ご自身がこの新しい契約を打ち立てる』者であることを自覚なさっていました。

しかし、それは、私達人間同士の契約のように、簡単なものではありませんでした。

ヘブライの9章22節には、

「血をながすことなしに、罪の赦しはあり得ない」

とはっきり記されています。

ヘブライの10章5節には、

「キリストは世に来られたときに、次の様に言われたのです。

『あなたは、いけにえや献げ物を望まず、むしろ、わたしのために、体を備えてくださいました。あなたは、焼き尽くす献げ物や、罪を贖うためのいけにえを好まれませんでした』

そこで、わたしは言いました。

『御覧下さい。わたしは来ました。

聖書の巻物にわたしについて書いてあるとおり、神よ、御心を行うために』

と記されています。

イエス様は、神様がイスラエルと、新しい契約を結ぶために、ご自身を遣わされたこと、そのためには、罪の贖いの血が流されなければならないこと、そのために、ご自身に、体が与えられたこと、そして、愈々血を流す時が来たこと、それは、十字架に架けられることであり、それによって弟子たちに、そして、全人類に、神様からの罪の赦しを与えられる。この事をイエス様は最後の晩餐を通して弟子たちに教えられました。

最後の晩餐を終えると、イエス様は弟子たちを連れて、オリーブ山へ出かけられました。

ユダだけは、いつの間にかその姿が見えません。オリーブ山の麓には、オリーブ畑が広がっています。イエス様と弟子たちは、そこにあるゲツセマネ(油絞りの意)という所に、祈るために行かれました。その園は、知人の所有地であったであろうと言われています。イエス様がエルサレムに来られた時の祈り場として、使われていて、ユダもその場所を良く知っていました。

イエス様はゲツセマネの園に来られると、36節で、弟子たちに、

「わたしが向こうへ行って祈っている間、ここに座っていなさい」

と言われました。その場所は園の入口が見える所だったでしょう。イエス様は8人の弟子達に、

「座っていなさい」

と命じられたのは、ただ、座っていれば良いと言うものではありません。イエス様は、

『ご自身がここで、捕らえられる』

事を、予想しておられました。そこで、8人の弟子たちには、

『ご自身を捕らえにくる人々を、彼らに見張らせて、祈りに専念しようとなさっていたようです』

そして、イエス様は、ペトロとゼベタイの二人の兄弟、ヨハネとヤコブを連れて、園の奥へと入って行かれました。37節を見ますと、

「ペトロおよびゼベダイの子、二人を伴われたが、そのとき、悲しみもだえ始められた」

とあります。詳訳聖書には、

「彼は心の深い悲しみ、苦悩を示し始められ、深く打ち沈まれた」

と訳されています。

イエス様は人の子として生まれ、人類の罪の贖いを使命として、十字架に向かって歩いて来られました。ご自身は全く罪を犯されなかったのに、何の罪も無いのに、十字架を負わなければならないのです。当時、十字架刑は、政治犯や、極悪人に科されました。その苦しむ姿は、民衆に見せしめとして、公開されていました。イエス様もこれまで、十字架刑の凄惨な姿を目にされた事でしょう。生身の人間にとって、その精神的、肉体的な苦痛は、想像するだけで発狂しそうです。イエス様は、神の御子だから、苦痛を感じなくなる、などと言うことはないのです。イエス様は身も心も完全な人間イエス様でした。同

じ感情をお持ちでした。

私達人間は、神様に対する罪の重さというものが分からないので、つまり、その償うべき量が分からないので、イエス様に対して、自分の罪を負って頂くにも拘わらず、他人事のように思ってしまいます。十字架を想われたイエス様は、何時も側近の弟子として、身近にいた、ペトロ、ヨハネ、ヤコブの3人に、ご自身のその苦しみを吐露しておられます。

「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、わたしと共に目を覚まして居なさい」と頼まれました。私達は、

『イエス様は、人間になられたと言っても、罪を犯されることのない、完璧なお方なのだから、人の悲しみに寄り添われることはあっても、ご自身は律して、悲しみに打ち勝たれるのではないか』

と、イエス様に人間離れたことを期待してしまいます。しかし、ヘブライ5章7節には、

「キリストは、肉において生きておられたとき、激しい叫び声をあげ、涙を流しながら、御自分を死から救う力のある方に、祈りと願いとをささげ、その畏れ敬う態度のゆえに聞き入れられました」

と記されています。

イエス様にとって、どの様な苦しみの中も、父なる神様の御手の中にあることが、全てを乗り越える力でした。そのためにイエス様は必死に祈られました。39節で、

「イエスは少し進んで行って、うつ伏せになり、祈って言われた」

とあります。その姿に

『父なる神様への遜りと必死の思い』が現れています。

「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください」

と祈られました。私達人間は、自分が何者であるのかが分からず、神様の前に、払い切れない罪がある事が分からないために、イエス様がこの時、人類の罪を負われるという事が、生身の人間としては耐えられないことであり、逃れる別の道はないのかと、必死に訴えておられるのに、**当の私**たちは傍観者になってしまっています。

イエス様はどんな辱めも、どんな痛みも、『それが父なる神様の御手に守られている

なら、耐える事がお出来になったでしょう』しかし、これから受ける十字架の苦しみは、恥辱と肉体の痛みに加えて、罪を贖うためには、**『神様に呪われ、捨てられなければなりません』**でした。』

その苦悩は、人間には分からない、**『神の御子のイエス様だけが、ご存知の世界でした。その苦しみを、イエス様は父なる神様に訴えて、』**
「父よ、できることなら」

と思いの丈を訴えて行かれたのです。父なる神様も、どれ程、苦しまれたことでしょう。

『愛し子を罪ある存在としなければならぬ、そして、罪は、呪い滅ぼされなければならぬものなのです』

しかし、これは、神の御子**イエス様にしか出来ない務め**です。イエス様はご自身の心の苦しみを、父なる神様に訴えることが出来、父なる神様は、その苦しみを知って下さり、**『神様が苦しんで居られる事が分かれると』**

「しかし、わたしの願い通りではなく、御心のままに」

と祈られました。

それから少し離れた所にいた、3人の弟子たちの所へもどって御覧になると、彼らは眠っていました。イエス様は弟子たちのため、私達全人類のため、私達には耐えられない、苦しみを受けられる時が、迫ってきています。ペトロ、ヨハネ、ヤコブは、この時こそ、祈って居なければならぬのに、睡魔に襲われ、眠ってしまっていました。そんなペトロに、イエス様は、

「あなたがたはこのように、わずか一時もわたしと共に目を覚ましていられなかったのか」

と言われました。ここでイエス様は、何も彼らの不甲斐なさに、腹を立てて、怒っておられるのではありません。問題は、罪に陥る危険があるからです。

41節に、

「誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えても、肉体は弱い」

と命じられました。岩波訳では、

「目を覚ましておれ。祈っておれ。試みに陥ってしまわないためだ。霊は逸っても、肉が弱いのだ」

と記されています。詳訳聖書では、
「誘惑に陥らないように、あなた達は皆、何時も、目を覚ましていて、厳しく注意して、用心して、見張りしていて、祈りを続けなさい。
霊は確かに熱心であるが、肉は弱いのである」
と訳されています。

このように別の訳から分かる事は、イエス様は決して

『肉体の眠りが悪い』
と言っておられるのではありません。肉の性質、つまりサタンの誘惑に引きずり込まれて行く、心の眠りに、見張りを置いて、

『サタンの誘惑に陥らないようにしなさい』
と言っておられるのです。そのためには、霊に燃えていなければなりません。それは祈りに依ってのみ得られる力です。イエス様ほど、祈りの力に満たされ、祈りによって歩まれた方はいません。その祈りの力を知っておられるだけに、弟子たちに、**祈りに目覚める事を求められました。**

弟子たちは肉体が眠っているだけではなく、祈りが眠っていました。霊的失敗は聖霊に満たされた祈りの欠如の現れであると言う事を、つくづく思わされます。イエス様は、3人の弟子たちに、祈りを呼び起こされると、再び、祈り場に戻られ、42節に、

「父よ、わたしが飲まない限り、この杯が過ぎ去らないのであれば、あなたの御心が行われますように」
と祈られました。

イエス様の願いは、父なる神様の愛に全信頼して、神様の御旨が成し遂げられて行く、そのことのみでありました。イエス様ほど、父なる神様に従順な方はいません。イエス様はこの様な限界状況にあっても、弟子たちの霊性を案じて、再び3人の所に来られますと、彼らは眠っていました。

『ひどく眠かったとあり、人間が抵抗出来ない闇が覆っていました』。
イエス様は彼らを離れて、3度目も同じ言葉で祈られました。イエス様は父なる神様への心の底からの祈りによって、聖霊に依る力を得られ、心を定められました。

祈りから立ち上がられたイエス様は、まだ、眠っ

ていた3人の弟子たちの所へ行って、
「時が近づいた。人の子は罪人たちの手に引き渡される。立て、行こう。
見よ、わたしを裏切る者が来た」
と言って、ユダを先頭に、ご自身を捕らえに来た人々に向かわれました。イエス様はゲツセマネの祈りによって、人類の罪が赦される、神様との新しい契約が打ち立てられる、十字架に向かう力を得られました。それは、私達の罪が赦されるためでした。私達は傍観者であってはなりません。

『自分の罪を分からせてください。イエス様の痛みを知る者とならせて下さい』
と、心から祈り求めてまいりましょう。

お祈りを致します。
憐れみ深い天の父なる神様

自分の罪の重さが解らず、イエス様が私達の罪の赦しのために、身も心も苦しみ、ご自身を十字架に差し出して行かれますのに、霊的眠りに陥っている、この深い深い罪をお許し下さい。更に罪を示して下さい、霊に目覚めて祈り、イエス様の十字架の道行きに、従って行く者とならせて下さい。

救い主イエス・キリストの
お名前によってお祈りを致します。
アーメン。